

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 17 日現在

機関番号：33920

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02705

研究課題名(和文)社会的コンテキストの中にあるEFLライティング・タスクの開発

研究課題名(英文) Developing L2 (English) writing tasks that allow learners to practice writing with social context

研究代表者

久留 友紀子 (Kuru, Yukiko)

愛知医科大学・医学部・准教授

研究者番号：00465543

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：教室で行われるライティングは、読み手の存在や書く目的といった社会的要素を考慮するに至らないことも多い。本研究では、第二言語(英語)学習者が、読み手を意識し、目的を達成するために書くことを学ぶことができるタスクを開発することを目指している。「なぜ書くのか」「どのように書くのか」「何を書くのか」を継続的に問うことで、ライティングと関係する社会的な要素について学習者の「気づき」を促すことを目指したパイロット・タスクを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ライティングは社会において重要視されるスキルであるが、習得が難しいことも事実であり、第二言語においては尚更である。従って学校教育の段階で、実社会で役に立つライティングスキルを身に付けることを目標にした練習を行う必要がある。本研究では、日本人大学生が読み手や書く目的、スタイルやジャンルを意識し、それらを考慮した方略のもとに書くことを練習できる、第二言語ライティング・タスクの開発を目指した。

研究成果の概要(英文)：Writing practice done in language classes may lack social context, resulting in little attention to the purpose or audience of writing. Our project aims to develop writing tasks that allow second language (English) learners to practice writing to achieve an objective with good awareness of audience. We have developed a pilot task where learners are asked why to write, how to write, and what to write in a consistent manner so that they may raise their awareness of the social factors involved in writing.

研究分野：英語教育

キーワード：第二言語ライティング タスク開発 ライティングの社会的コンテキスト ライティング評価

1. 研究開始当初の背景

大学(以下すべて短大も含む)という高等教育における英語教育では、論理的な思考を高め発信する能力を育成するために学習者のライティング能力を十分に伸ばすことは大変重要な課題である。まとまりのある文章で自分自身の考えを英語で表現し伝えるために必要な力を養うためには、パラグラフ・ライティングやエッセイ・ライティング指導が有効であると考えられており、実際、現在の大学で行われる英語のライティング教育では、そのようなパラグラフ・ライティングおよびエッセイ・ライティングが主流となってきている(大森, 2010)。

パラグラフ・ライティングおよびエッセイ・ライティング指導は、日本人英語学習者が必要とする英語でのライティングの基本的な知識やスキルを養うことが期待できる点において大いにその有用性が認められる一方で、そういった指導の中で扱われる課題の多くにはライティングの社会的側面の欠如することが指摘される。つまり、教室で行われるライティング指導のコンテキストでは、課題として読む以外の目的を持つ読み手が不在であり、課題だから書くという以外に書く目的がなく、その結果、実際にライティングが行われる場合に本来的にある社会的要素(真の読み手、読み手の目的、書き手の目的、スタイルやジャンルの選択、そして目的達成のための方略など)に対して注意が払われることがほとんどない可能性がある(Matsuda, 2014)。

ライティング指導における社会的側面の欠如という、この問題は、日本人英語学習者がライティングによって目的を達成できるようになるかどうかに関わる重要な問題である。というのは、実際に社会においてライティングを行う際には、誰が読むのか、何のために書くのかということによって、どのような内容をどの程度詳しく、どのような形式と文体で、どのような構成でどの程度の長さで書くのか、などを書き手が考えて決めなければいけないからである。実社会で役に立つライティング能力を、社会的側面の欠如した練習から身に付けることは難しい。

Matsuda (2014)によれば、ライティング指導のコンテキストが教室のコンテキストを免れることはないが、教室のコンテキストと、ライティングの本来的な社会的コンテキストと重ねることは可能であり、それはそのような社会的要素への考慮を要求するライティング・タスクを課すことによるとされる。そこで本研究では、これまで教室のコンテキストの中にだけあったタスクに社会的要素を加え、学習者が実社会においてライティングを通じて目的を達成できるよう力を養成するライティング・タスクを開発することを目指した。

2. 研究の目的

第二言語(英語)学習者が実社会で役に立つライティングスキルを身に付けることを目標として、本研究では、教室のコンテキストにおいても読み手を意識し、目的を達成するために書くことを学ぶことができるタスクを開発する。考案したタスクは、その効果をプロダクトであるテキストの評価に加え、学習者の気づき、動機づけ、そしてライティングの方略において検証することを目指し、授業で実践する。なお、本研究においては、実社会を「現在日本で働く社会人を対象とした職場」であると操作的に定義する。

3. 研究の方法

上記の目的のために、具体的には以下の(1)~(4)に述べる方法をとった。

(1) 日本人が実社会において英語でライティングを行うコンテキストにはどのようなものがあるかを調査するために、日本で英語教育を受けた社会人を対象に質問紙調査を実施した(Kuru, Yamanishi, Kinshi, Otoshi, & Masaki, 2017; Kuru, Yamanishi, Kinshi, Otoshi, & Masaki, 2019)。調査はオンライン・アンケートとし、現在日本で働く社会人を対象に、職場で英語を書くことがあるかどうか、その経験を尋ねた。現在または過去において経験のある場合は、仕事の業種・職種に加えて、どのような文章を英語で書く(書いた)のか、英語で書くときには何か利用するか、どれくらいの時間を使うか、特に気を付けていることがあるか、苦労や失敗は何か等を尋ねた。さらに、最終学歴と、学校時代の英語の授業で学んだことのうち英語で文章を書くときに役にたったと思うこと、学べていればよかったと思うことを尋ねた。回答は全て自由記述で得た。

(2) パイロット・タスクの開発は、上記質問紙調査の結果と共に、ジャンル・アプローチの理論を考慮して行うこととした。Hyland (2004)の指摘するように、「ジャンル」は言語、内容、そしてコンテキストの全てに関与し、ライティングでコミュニケーションをとるために必要となる方策を明示的かつ体系的に説明することを可能にするからである。インプットとして使用するテキストは「真正性」の確保のため、実際に特定の目的のために実社会で使用されたものを用いることとした。

考案したパイロット・タスクは、その効果をプロダクトであるテキストの評価に加え、学習者の気づき、動機づけ、そしてライティングの方略において検証することを目指し、授業で実践した。

(3) 学習者の気づきがどのように起こるかについて、日本人大学生に対して実証的な調査を行

った(金志・大年・久留・山西, 2015)。学際的な学部専攻の3年次生37名が受講する英語ライティングの授業で、学習者が評価ルーブリックを使ってペアでの相互評価と自己評価を行った。その後、相互評価・自己評価によって改善点に気づくことができたかどうか、また気づいた場合はどのような改善点に気づいたかについて、質問紙調査を行った。改善点に気づくことができたかどうかは、「よく気づいた」「少し気づいた」「あまり気づかなかった」「全く気づかなかった」の4件法で、またどのような改善点に気づいたかは自由記述で回答を得た。

(4) プロダクトであるテキストの評価に関しては、日本人大学生の英作文について、評価・指導の上で重要な「構成」(organization)に焦点をあてた検証を行った(大年・久留・山西・金志・正木, 2017)。英語ライティングの授業内に書かれた30名の作文を、英語母語話者教員と日本人英語教員が異なる方法で評価した。英語母語話者教員4名は、各自の判断基準に基づいて4段階で評価した上、その判断根拠を回顧的自由記述で回答した。一方、日本人英語教員は、評価ルーブリックを使用して4段階で評価し、同じくその判断根拠を回顧的に自由記述で回答した。いずれの場合も評価は一人一人が独立して行った。量的分析として、英語母語話者教員と日本人英語教員の評価スコアの相関分析を行い、併存妥当性を検討した。質的分析には、回顧的自由記述についてKJ法(川喜田, 1967)におけるグループ分けの手法を使った。

4. 研究成果

方法で記した(1)~(4)の研究について、以下の成果が得られた。

(1) 日本で英語教育を受けた社会人を対象にオンラインで実施した質問紙調査(Kuru, Yamanishi, Kinshi, Otoshi, & Masaki, 2017; Kuru, Yamanishi, Kinshi, Otoshi, & Masaki, 2019)では、51人から有効回答が得られ、そのうち25人に職場での英語のライティングの経験があることが分かった。25人の業種・職種は様々であった。多くの方がeメールを書いていたが、目的や読み手、長さなどは様々だった。文法や語彙と同時に、分かりやすさや丁寧さに注意する、あるいは苦労するという回答が目立った。オンライン辞書や翻訳サイトが好まれて使われていることも分かった。学校時代の英語教育については、文法や語彙、あるいはエッセイ・ライティングが役に立ったという回答が得られた一方で、より実用的・実践的な英語を習いかけたという回答も目立った。

(2) 読み手を教室の外に持つようにしたタスクはこれまでも単発的に見られたが、本研究では単に読み手だけではなく、目的達成のために社会的コンテキスト全体を意識させるタスクを開発することとした。また、ジャンル準拠アプローチ、特にSystemic Functional Linguistics (SFL)の理論からジャンルに関する検討を行った。しかし、異なる学部に属し異なる分野に進む学生の混在する教室では全ての学習者にとって等しく意味のあるジャンルを特定することは現実的でない判断し、学習者自身が将来必要に応じてジャンル分析を行えるようになることを目標とすべきではないかという結論に至った。パイロット・タスクは、ジャンル分析に必要な要素についての「気づき」を、「なぜ書くのか」「どのように書くのか」「何を書くのか」というプロセスの中で促すことを目指したものとした。同時に、アンケート調査の結果にも示唆されたように、第二言語でのライティングは、言語そのものに対する指導が必要であると考え、文法や語彙に加えて、表現の丁寧さがどのように言語に現れるか等も取り上げることにした。考案したパイロット・タスクは授業で実践したが、その効果の検証は今後の課題として残った。

(3) 学習者の気づきがどのように起こるかについて行った調査(金志・大年・久留・山西, 2015)では、ライティングの内容や語彙については、「よく気づいた」「少し気づいた」の、気づきにポジティブな回答が70%を超えるのに対し、文章の構成や文法についてはポジティブとネガティブに回答が分かれた。綴りや句読点についてはネガティブな回答が70%を超えた。自由記述で回答された改善点は、内容については「要求する論旨にズレた内容が多かった」「展開をもう少し幅広くするべきだった」など、語彙については「同じ語が繰り返していることに気づいた」「言葉の選び方が適切ではなかった」などであった。この調査では、評価ルーブリックを使った相互評価・自己評価を行うことで、学習者の気づきは、内容や論の展開、あるいは語彙については促進される可能性があることが分かった。

(4) プロダクトであるテキストの評価に関して日本人大学生の英作文の「構成」に焦点をあてた検証(大年・久留・山西・金志・正木, 2017)では、「構成」は英語母語話者による全体的評価との併存妥当性が低かった。その理由を、評価基準を記した自由記述の質的分析によって追跡したところ、導入部の評価に関係する可能性が示唆された。

引用文献

- Hyland, K. (2004). *Genre and second language writing*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- 川喜田二郎 (1967). 『発想法 創造性開発のために』中央公論社.

Matsuda, P. K. (2014). Making writing assignments engaging. Unpublished manuscript, Waseda University, Tokyo, Japan.

大森裕實 (2010). 「ライティングの問題点と新たな視点」木村博是・木村友保・氏木道人 (編) 『リーディングとライティングの理論と実践 英語を主体的に「読む」・「書く」』大修館書店.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

(1) 大年順子、久留友紀子、山西博之、金志佳代子、正木美知子 (2017). 「『ループリック 2009』の妥当性についての検証 構成を中心に」『JACET 関西支部ライティング指導研究会紀要』12, 13-24. 査読有

(2) Yukiko Kuru, Hiroyuki Yamanishi, Kayoko Kinshi, Junko Otoshi, Michiko Masaki. (2019). English Writing Episodes in the Japanese Workplace: A Survey Study. 『JACET 関西支部ライティング指導研究会紀要』13, 25-30. 査読有

〔学会発表〕(計 2件)

(1) 金志佳代子、大年順子、久留友紀子、山西博之 (2015年8月6日). 「指導ツールとしてのライティング・ループリックの効用：学習者の気づきを促進させる試み」外国語教育メディア学会 第55回(2015年度)全国研究大会 千里ライフサイエンスセンター 大阪府

(2) Yukiko Kuru, Hiroyuki Yamanishi, Kayoko Kinshi, Junko Otoshi, Michiko Masaki (2017年7月1日). Developing L2 (English) writing tasks: Building a bridge to business writing. Symposium on Second Language Writing 2017, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：山西 博之
ローマ字氏名：(YAMANISHI, Hiroyuki)
所属研究機関名：中央大学
部局名：理工学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：30452684

研究分担者氏名：大年 順子
ローマ字氏名：(OTOSHI, Junko)
所属研究機関名：岡山大学

部局名：全学教育・学生支援機構

職名：教授

研究者番号（8桁）：10411266

研究分担者氏名：金志 佳代子

ローマ字氏名：(KINSHI, Kayoko)

所属研究機関名：兵庫県立大学

部局名：経営学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：20438253

研究分担者氏名：スレイター ケネス

ローマ字氏名：(SLATER, Kenneth)

所属研究機関名：愛知医科大学

部局名：医学部

職名：講師

研究者番号（8桁）：10728778

(2)研究協力者

研究協力者氏名：正木 美知子

ローマ字氏名：(MASAKI, Michiko)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。